

はしがき

慣例に従い「はしがき」が必要と命ぜられたので、僭越ながら書かせていただく。

本『古代文学論叢』も大きな区切りとなる第二十輯を迎えたこの折、時宜になつた特集「源氏物語 読みの現在」をおおくりする。

今や研究者の関心は遠く深いところまで進展していきつており、その意味では活況を呈していて好もしいかぎりとしてよいのかもしれない一方で、各自がそれぞれの手法で推し進めていくあまり、問題意識や成果が広く共有されにくいという支離滅裂の状況にあるとも観測されなくもない。幸いなことに、本論叢にお寄せいただいた諸考察からは、懇切丁寧な論述を心がけてくださったお蔭で、論点とその突破口も、新しい切り口とその所以もはっきり見えてきた予感がある。

以下、各論考の要旨を紹介させていただくことにしたい。

① 今井久代氏「『源氏物語』の見つめる「情」」は、「あはれ」や「みやび」に比べて微温的情愛、また風流心である「なさけ」に着目し、その用例の多さ、語義の多彩さをもとめず、王朝文学作品における用法の特色をも確認したうえで、「情あり」「情なし」と、見せる、見られる問題、場面の対人関係において呼び込まれる自然美などと絡めて論じたもので、とりわけ雨夜の品定め、光源氏の対六条御息所の情動について詳細に分析する。

② 工藤重矩氏「源氏物語の本文校訂と解釈」（副題は省略。以下、同様）は、近年盛んな本文研究の成果や、さまざまな伝本のうちのある一本を読む態度を強く意識した論で、新日本古典文学大系の校訂を俎上にのぼせ、大島本のみによつて本文を立てることに難点があることを浮かび上がらせる。さらに、行幸巻の大原野の行幸の条を例に挙げ、准拠と考えられる吏部王記の逸文を補助線として、青表紙本系・河内本系・別本の間や青表紙本系内部で異なる生じた諸例

につき考察を加え、誤字・脱字の訂正として処理しうる場合から、誤った本文への手当ての仕方、吏部王記により近い本文をどう判定し、生かすか参照にとどめるべきかなど、校訂にあたって考慮すべきさまざまな場合が示された。

③ 今野鈴代氏「添えられた一文」が語るものは、「何げなく添えられているゆえに：見落としがちな一文：が示唆するところを考察したもの」で、余分な言い添えというか、語り手（書き手）がそれまでの描写や説明からデータチメントした部分が問題とされる。たとえば葵巻の、葵上の喪に服す源氏が手習いした反故を、「（左大臣が）目をおししほりつつ見たまふを、若き人々は、悲しき中にもほほ笑むあるべし」や、行幸巻の、玉鬘の裳着の腰結び役を引き受け上機嫌な内大臣につき、子息たちの供人たちが「またいかなる御譲りあるべきにか」とひが心得する描写など、全部で十場面を取り上げ読み解いて鑑賞を深め、その場面のリアリティと奥行きを感じさせる効果を実感させる。

④ 高木和子氏「源氏物語における人物造型の方法」は、作中人物論に集約されるような古典的鑑賞法をめくり、改めて物語の方法としてとらえなおす試みで、作中人物の対照性や非自立性と視点人物の介在を読み取るべきこと、内面描写の物足りなさについても別のある人物が代替補完していると見なせること、女性群像には個別的な差異も存在するが類型的な系譜が見いだせることなどを引き出し、源氏物語世界の展開に従って見ていくとそこに変奏と深化のあることが指摘される。また、史上的人物と重ね合わせる准拠論の方法も、人物像の内面の形象の現実性に寄与しており、人物の登場のさせ方においても後になって、あるいは過去に遡って小出しに事情を詳述する方法があって、物語世界の中に定位されるという。

⑤ 栗本賀世子氏「桐壺の一族」は、見かけ上、桐壺更衣―光源氏―明石姫君と主人公一族が三代にわたって桐壺を独占使用していることについて、まず史上の専有の例と比較考察し、殿舎の直接的な継承には、祖父摂政兼家が淑景舎を直廬とし、父道隆を経て、東宮居貞親王妃となった娘原子に譲られた例などがあって、そこには一族の権力と拠点維持する目的と、帝や東宮の御座所の近くに娘や妹・姪を据える優遇策がうかがえるという。これに合致するのは姉大后

から妹隴月夜尚侍への弘徽殿の継承のケースで、源氏の場合には過去にゆかりのあった殿舎の再使用というように描き分けられ、源氏は権勢志向を望まず、その理想性は保たれているとする。

⑥ 加藤昌嘉氏「改めて「浮舟」巻を読み直してみると……」は、明融本を底本として本文を整定している現行の諸注釈書を参照しつつも、鎌倉期写本である蓬左文庫本によって浮舟巻を読み進める作業の報告である。ある一本を読解してみると立場の実践であるが、明融本には論文の範囲内では三箇所脱文があると考えられること、蓬左文庫本にも脱文があり他本をもって改訂して読むべきこと、明融本「いとあまりなる人のかたみとて、さるまじきところに、たびねし給らむこと」は、蓬左文庫本「いとあまり、なきひとのかたみとて、さるあらしきところに、たびねしたまふらん事」の本文でよく理解されること、言い換えれば明融本の「なる」は「なき」の誤写、「さるまじき」は「さるあらしき」の脱字か、などを指摘する。氏の立場については②工藤論文に、工藤氏の立場については資料篇の高田解題に言及があるというように、底本の選定や本文の整定をめぐる考察は現在もっともホットな話題で、夢の競演が実現したことを喜ぶたい。

「はしがき」からは逸脱するが、ここで贅言させていただくと、本文研究が新しい段階へと飛躍する過渡期にあることが見えかけてきたということなのだと思う。たとえば、青表紙本系統と一括りにされる本の中には、（鎌倉写本なら）青表紙本の元になった本かこれに近いある別本の系譜に立つもの、別本に青表紙本系統の本文が校合されたもの、青表紙本系統の末流のものが混在していると見るのが自然で、まずは内部を小グループ化し、小グループ間の関係や系統別が考えられてしかるべきであって、むしろ逆に、どうしても青表紙原本を復元するというのなら、どうすればそれが可能になるのか、新たな手立てが編み出されなければならない、そんな感じがしている。

また現象的には、新しい本文論・読解論を唱える立場から旧来の説を成り立たせている根拠を問うて、原理的に相容れない主張がなされているように見える。つきつけられた問題は深刻で、物語創造の現場に立ち会おうとするのか、文

化史的な書承・享受の場に踏みとどまるべきなのか、古典を現代によみがえらせるとはどのようなことかなどという難問が立ちはだかっているかのごとくであるが、その内実は本文研究の現状認識への反省が出发点にあって、まだ文化史的な評価が提出されていない現状にあっては、双方それぞれに方法面での窮屈な縛りがあることを自覚したうえで、各自があえて立場を変えて行き来しながら橋渡しする方策を模索するよりほかないのではなからうか。諸本論ウォッチャーとしての感想を書きつけさせていただいた。

⑦ 神田龍身氏「源氏物語」「若菜」巻・断章」は、若菜上・下巻に見える紫の上の二度の手習の言葉と六条御息所とおぼしき物の怪の言葉との間に一つの論理的脈絡を認め、これらが源氏が係わった多くの女たちの集合的無意識の表象としてあるのに、これに正面から向き合おうとしない源氏像をおさえた後、物語の言葉という外部が登場人物たちの自己発見の媒介物となっている第二部の世界に押し広げて、受け身的主人公像としての源氏が定位されていることを論じる。若菜巻を別括する氏のエクリチュールの論理の視点は、柏木の恋文や明石入道の遺言書、朱雀院にとつての女三宮、編年体の時間進行や源氏四十の賀事などの読みをも貫く迫力をもっている。

⑧ 倉田実氏「裳を着けた尼姿の女三宮」は、副題に「源氏物語絵巻」「鈴虫(一)」段から」とあるとおり、そこに描かれた女性を女三宮と確認し、場面の状況を読み解いたものである。出家とは私の弟子になることで、仏の前で正装する尼装束としては、貴族女性の正装である裳唐衣の唐衣の代わりに袈裟を着たこと、裳にも女性用の裳と僧の裳の別があったこと、頭巾も一具であることを貴族の漢文日記などにより指摘し、源氏物語でも衣配りの段の空蟬用の「聴色なる(裳)」、横川僧都が出家する浮舟に着させた「わが御上の衣(法服の袍と裳)、袈裟」がそれであるという。

⑨ 高田信敬氏「梗概書の変容」は伝下冷泉持為筆四半切一葉の、梗概書とおぼしき梅枝巻末尾と藤裏葉巻冒頭の二面を紹介し、ツレの梅枝巻冒頭も掲げた後、書写の形式から寺本直彦氏蔵伝後土御門院筆「十帖源氏」(玉鬘十帖のみの残欠本)との関連が考えられるとする説に賛意を表し、新たに、九曜文庫本伝猪苗代兼載筆「源氏一部抜書」の連歌の付

合語の部分を除く梗概部分が「十帖源氏」とも古筆断簡とも酷似し、三者の本文が異本関係にあることを証明して、祖本となる梗概書の成立が鎌倉時代にまで遡る可能性を指摘する。

⑩ 小町谷照彦氏「平安文学享受史の一端」は、手元に収集された、源氏物語にもとづくものを中心とした近世・近代の「遊戯関連資料の紹介など」(副題)を試みたもので、『源氏かるた絵合』「小型木版画源氏物語」などのほか、投扇興・双六・カルタ・百人一首関連のものにつき、時に解説にも及ぶ。氏には「絵とあらずして読む源氏物語」(新典社、平成十九年)があつて、「日本人は歌と絵で古典教養を身に付けてきた」(あとがき)として、近世後期の古典啓蒙書にもとづき、「源氏物語」「伊勢物語」「百人一首」、和歌三神・二歌聖・六歌仙・三十六歌仙、三夕の歌・近江八景の歌・六玉川の歌」を挙げ、源氏物語の場合、「源氏物語香函引歌」の類が入門書で、ついで啓蒙的な梗概書に進むという享受の裾野を明らかにし、溪斎英泉『源氏物語絵尽大意抄』を紹介解説していた。

小町谷照彦氏は、平成二十六年十月三十一日逝去された。三代集また物語における歌ことば表現の研究を推進され、王朝文学理解に欠かせない編著書を編んでおられる。本論文が絶筆となった。謹んで御冥福をお祈り申し上げる。

⑪ 伊井春樹氏「白井鐵造『紫式部』成立の背景」は、宝塚歌劇の作家、演出家として知られる白井鐵造の作品『紫式部』(昭和四十一年)につき、昭和三十八年にユネスコにより「世界の偉人」に紫式部が選出されたことや当時の学界の研究状況といった背景を明らかにしたうえで、白井が受け取った宝塚の大先達小野晴通からの三通のコメントの手紙と挿入歌の原稿を紹介し、作品執筆までに三案もの腹案が行き来した跡をたどった後、一応の完成を見たガリ版刷りの台本にもなお削除、補入などのあることまでを見わたしたたもの。執筆にとりかかってから初日まで一箇月もなかったというのは驚異である。

資料篇には、高田信敬氏による「伝冷泉為相筆 源氏物語須磨付帚木残簡 解題・翻字」を収載することができた。当該書は鶴見大学図書館の所蔵になる。解題では、詳細な書誌的事項を記載するほか、表紙が同意匠である僚巻が知ら

れていることもあって、これが原表紙であるとは考えにくいことを考察し、本文については大島本との異同、青表紙本群内での親疎、また河内本系本文との重なりを見晴らして、青表紙本群の中の孤立本文といっても別本の本文を伝えていくかもしれないこと、河内本系の本文と見られているが別本の本文を伝えていくかもしれないことなど、従来の三分類間における異同の把握については常に見なおされなくてはならないことに注意をうながす。諸本論に一石を投じたものなので、一言触れさせていただいた。

平成二十七年二月二十八日

紫式部学会会長 三角洋一

目次

はしがき	三角洋一
研究篇	
『源氏物語』の見つめる「情」 <small>みなとけ</small>	今井久代
源氏物語の本文校訂と解釈	工藤重矩
——一つの伝本を尊重する読みをめぐって——	
「添えられた一文」が語るもの	今野鈴代
——『源氏物語』に見る一つのしかけ——	
源氏物語における人物造型の方法	高木和子
桐壺の一族	栗本賀世子
——後宮殿舎継承の方法をめぐって——	

改めて「浮舟」巻を読み直してみると……………加藤昌嘉……………二四一

『源氏物語』 「若菜」巻・断章……………神田龍身……………二六九

——手習の言葉から物の怪の言葉へ——

裳を着けた尼姿の女二宮……………倉田実……………一八九

——『源氏物語絵巻』 「鈴虫(一)」段から——

梗概書の変容……………高田信敬……………二二一

——伝下冷泉持為筆四半切・『十帖源氏』・『源氏一部抜書』——

平安文学享受史の一端……………小町谷照彦……………三三九

——遊戯関連資料の紹介など——

白井鐵造『紫式部』成立の背景……………伊井春樹……………二五三

資料篇

伝冷泉為相筆 源氏物語須磨付帚木残簡 解題・翻字 高田信敬……………二七七